

「口承文芸の調査急務」

石川県内に伝わる民話など口承文芸を語り継いできた伝承者が年々減少し、研究者の後継者不足も重なり、専門家から早急な調査の必要性を説く声が上がっている。

このほど金沢市内で開かれた加能民俗の会第384回研究例会では、藤島秀隆会長（金沢工大名誉教授）が「この3年のうちに調査を進めなければ、語り継がれてきた口承文芸がどんどん失われてしまつ」と危機感を募らせた。写真。

藤島会長は昨年の第67回北國文化賞受賞を記念し、「口承文芸か

加能民俗の会 藤島会長が指摘



ら伝統芸能まで」と題して講演した。大正一けた生まれが100歳を超え、昭和一けた生まれも90歳近くになる現状から、民話などの

調査が急務であることを指摘し、「昔話や伝説を研究する若手が出てこなければ、聞き取り調査もできなくなる」と後継者の育成を呼び掛けた。

西山郷史副会長は「説教・長太ムジナ成立の背景」と題して研究発表し、真宗の僧侶が説教を通じて語り部となり、門徒が自宅に帰って家族に伝えることで民話が語り継がれてきたと紹介した。1960（昭和35）年頃まで金沢市内に13カ所あったとされる真宗の常説教所も、1998（平成10）年頃に最後の1カ所が閉じられるなど、説教を聞く機会が減少し、民話が次世代に受け継がれなくなっている現状を説明した。